

Title	ロールズにおける道徳原理とその正当化
Sub Title	Rawls' moral principles and his justification
Author	森, 庸(Mori, Yasushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1989
Jtitle	哲學 No.88 (1989. 6) ,p.81- 104
JaLC DOI	
Abstract	Rawls' argument for the justification of his two principles of justice is not to prove their truth in the ordinary sense. Instead, he intends to show that we will accept them if we are determined to organize a well-ordered society, where social cooperation is carried on according to the set of rules each member of the society obey voluntarily. In order to demonstrate that, Rawls presents the so-called two kinds of arguments, the contract argument and the coherence argument. I have tried in this article to show that these arguments must not be interpreted separately, but as the two stages of a unified argument. In the contract argument he uses the device of social contract in the original position. This device is an illustrated process we have to follow in order to get the principles acceptable to all the citizens of modern democratic society. In the coherence argument, the principles chosen are checked by referring to our considered judgments, because we are supposed to want to have a set of rules compatible with them. In the case of conflict between the principles and judgments, we need to reconsider the process of contract and our judgments. Rawls hopes that, by going back and forth between the two stages, we will reach the reflective equilibrium and accept his principles of justice.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000088-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000088-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ロールズにおける道徳原理と その正当化

森

庸\*

## Rawls' Moral Principles and His Justification

*Yasushi Mori*

Rawls' argument for the justification of his two principles of justice is not to prove their truth in the ordinary sense. Instead, he intends to show that we will accept them if we are determined to organize a well-ordered society, where social cooperation is carried on according to the set of rules each member of the society obey voluntarily. In order to demonstrate that, Rawls presents the so-called two kinds of arguments, the contract argument and the coherence argument.

I have tried in this article to show that these arguments must not be interpreted separately, but as the two stages of a unified argument. In the contract argument he uses the device of social contract in the original position. This device is an illustrated process we have to follow in order to get the principles acceptable to all the citizens of modern democratic society. In the coherence argument, the principles chosen are checked by referring to our considered judgments, because we are supposed to want to have a set of rules compatible with them. In the case of conflict between the principles and judgments, we need to reconsider the process of contract and our judgments. Rawls hopes that, by going back and forth between the two stages, we will reach the reflective equilibrium and accept his principles of justice.

---

\* 慶應義塾大学大学院文学研究科 (倫理学)

ジョン・ロールズの〈公正としての正義〉では、二つの正当化の議論が使われているということがしばしば指摘されている。<sup>(1)</sup> すなわち、整合説的議論と契約説的議論である。整合説的議論とは、道德原理の正当性は我々の熟慮された判断 *considered judgments* に合致しているかどうかによって判定されるとするものである。これに対して契約説的議論は、道德原理はそれぞれが人々の合意に由来するものであるとき正当なものとなる、と主張する。若干の例外はあるとしても、ロールズを論ずる人々の多くは、この二つの正当化の議論のうちどちらかを斥けるかまたは無視をして、一方にのみ議論を集中させている。

しかしながら、このような指摘にも拘わらずロールズは、『正義の理論』以後の多くの論文においても熟慮判断ならびに社会契約の二つの概念を使っているのである。このことは、ロールズ自身は〈公正としての正義〉に二つの異なった、互いに矛盾する正当化の議論が使われているとは考えてはいないことを示唆しているように思われる。

私はこの小論において、ロールズのいわゆる二つの正当化の議論を統一的に解釈してみたいと思う。

## 1

ロールズの〈公正としての正義〉を理解しようとする際にまず留意すべき点は、彼が行っている道德原理の「正当化」の性格を把握することである。仮りに道德原理の正当化なるものを、その原理が、客観的であれ主観的であれ、道德的事実あるいは道德的真理に合致していることを証明することだとするならば、ロールズが行っているのはそのような意味での正当化ではない。言い換えれば、人々が現にある道德的義務、特に彼が提示している正義原理に従うべき義務を負っているということを論証しようとしているわけではない。<sup>(2)</sup>

ロールズが行っているのは、人々が仮りにロールズの言う意味での道德

原理（これについては後述する）によって社会を形成しようと決意したとすれば、どのような原理を承認し受入れるであろうかを考察し、その結果おそらく人々は彼が示している原理の体系を受入れるであろう、ということ<sup>(3)</sup>を論証することである。

あるいは、ロールズは我々に向かって、この原理の体系には我々に訴えかけてくるであろうこのような長所や魅力があるのだから共に採用しようではないか、と呼びかけているのだと考えることもできる<sup>(4)</sup>。

ロールズが〈公正としての正義〉の理論全体において行っているのは、通常の意味での正当化ではないという点は、ロールズを理解するうえにおいてきわめて重要である。

ではロールズの言う道德原理、すなわち正の原理 the principles of right とは何であろうか。

我々人間は、我々が置かれた自然環境その他の条件から（ロールズはこれを「正義の環境 the circumstances of justice」と呼んでいる）社会なしでは生きていくことのできない、あるいは我々が望んでいるような満足な生活を送ることのできない存在である<sup>(5)</sup>。我々が生きていく上においてそのように不可欠な社会の形成・発展には秩序の維持が必要である。秩序を維持していくには様々な方法が考えられよう。現代においては、かなり進歩してきている社会心理学の理論や、高度に発達した科学技術を利用した教育や宣伝等によって、例えば現存秩序を人々に受入れさせることもできるかもしれない。

だがロールズが挙げているのは次の二つの方法である。ひとつは実力あるいは暴力によるものである。他のひとつは各人が一定の規則にしたがって各自の行為を規制することによって秩序を維持していこうとするものである。ロールズによれば、第一の実力による方法は避け<sup>(6)</sup>、第二の方法による道をとるのである。この第二の方法における、各人が守るべき行為規則がロールズにとっての道德原理である<sup>(7)</sup>。

道德原理には次の三つの原理が含まれるであろうとロールズは考えている。<sup>(8)</sup> 直接個人に適用される原理、社会の基本構造に適用される原理、国家間の関係を律する原理である。二番目の原理が正義原理と呼ばれるものであって、伝統的に用いられている正義の概念とは必ずしも一致しない。<sup>(9)</sup> ロールズは社会の個人に与える影響の大きさから、この正義原理を道德原理の中で最も重要なものと見做している。<sup>(10)</sup> したがってその探求を中心とするがゆえに、自らの道德理論を〈公正としての正義〉と称する。正義原理のみならず、他の二つの原理も探求の対象となるとき、この理論は〈公正としての正 right as fairness〉と呼ばれることになるであろう。<sup>(11)</sup>

ロールズは、第一の方法は避け第二の方法によるべきである、そのような義務が何ものかによって人間に課せられていると言っているわけではない。社会を形成するに当って第二の方法をとりたいというのは、ロールズの願望もしくは理想である。と同時に、この理想は現代の民主主義社会の多くの人々によっても共有されているとロールズは考えているのである。<sup>(12)</sup>

つまり、人々が自発的に一定の行為原理を受入れ、それに従うことによって秩序を維持している社会、すなわち秩序ある社会 well-ordered society が〈公正としての正義〉の理想であり前提となっていると言うことができよう。ロールズは〈公正としての正義〉の最も基本的な二つの概念の一つとして秩序ある社会を挙げているが、それはこのことを意味している。<sup>(13)</sup>

このように〈公正としての正義〉における道德原理とは、人々が共同で選択するものである。換言すれば、他の人々も同様の原理に従うという条件の下で、各人が受入れ従おうとする原理である。ブランドやヘアの道德理論とは、道德原理を合理的選択の対象と考えるという側面では共通性を有しているものの、この点で異なっている。ブランドやヘアの理論においては、道德原理は一人ひとりの人間が単独で選択するものとされている。<sup>(14)</sup>

要するに人々が一定の原理にしたがって自分達の行為を規制することに

よって社会的協力関係を維持発展させていこうと決意するとき、人々はどのような原理をその原理として、すなわち道德原理として選ぶであろうか、というのがロールズにとっての問題なのである。

## 2

道德原理をこのように規定するならば、道德原理は人々が強制によらず自発的に受入れられるものでなければならない、ということになる。道德原理が満たすべきこのような要件は、その最初の論文『倫理学における決定手続の概要』においてロールズが強調していた点である。<sup>(15)</sup>

では人々はどのような原理を道德原理として自発的に承認し受入れるであろうか。

それを知るための手がかりとしてロールズがまず持ちだすのが熟慮判断である。もしすでに人々の間で、ある種の問題に関してどのように対処すべきかについて、判断の一致が成立しているとするならば、すなわち熟慮判断が成立しているとするならば、人々はこの熟慮判断と一致する判断が導き出されるような原理を受入れようとするであろう。

ここで注意すべき点がある。それは熟慮判断に関してである。大半の論者は熟慮判断なるものを、問題となっている事柄に関して、一人の人間が、様々な事情を考慮した上で適当な環境・精神状態の下で確信をもって下した判断のことだと考えているように思われる。だがこれは間違っている。確かにそのような言い方をしている個所もある。<sup>(16)</sup> またノーマン・ダニエルズは熟慮判断をそのように解釈し、それに基づいた反省的均衡論を展開している。<sup>(17)</sup> しかしながらロールズが道德原理を導き出し、ロールズが言う意味での正当化を行うための手がかりとしての熟慮判断は、単に一個人が確信をもって下した判断ではない。P. シンガーが推測しているように人々の間で一致した判断なのである。<sup>(18)</sup>

これは全く熟慮判断のみから道德原理を求めようとした最初の論文にお

いて明らかである。<sup>(19)</sup> また『正義の理論』においても、原理の正当化の基礎となる判断は、人々が共有し、ともに受入れている判断である。<sup>(20)</sup>

ロールズが熟慮判断を持ち出すのは、人々がどのような原理を受入れるかということを知るための手がかりとしてであって、熟慮判断の中に道德的真理が、とりわけ客観的な道德的真理が現われているはずだと考えているからではない。したがって、熟慮判断を議論の基礎としているという点でロールズを直覚主義者と批判しているヘアやブラントは、ロールズを誤解していると言えよう。<sup>(21)</sup>

そもそもロールズは客観的な道德的事実ならびに真理の存在を否定しているように思われる。この点は最初の論文以来、『正義の理論』以後においても明瞭ではなかったが、1980年の論文『道徳理論におけるカント的構成主義』においてかなり明確に示されている。ロールズが否定している客観的な道德的事実とは、我々以外の何ものかから我々に与えられた秩序、という意味での事実である。<sup>(22)</sup> ロールズはこれをまた「事物の本質によって与えられる given by the nature of things」秩序とも表現している。<sup>(23)</sup> 道德的真理のこのような捉え方は、道德的真理を「世界の構造の一部 part of the fabric of the world」と表現している J. L. マッキーと共通するものである。そしてマッキーがそのような道德的真理を否定しているのと同じように、<sup>(24)</sup> ロールズも否定している。

したがってロールズが肯定的に道德判断の客観性と言う場合の客観性とは、我々とは無関係に存在する秩序に合致しているという意味での客観性ではなく、<sup>(25)</sup> 人々の判断における一致という意味での客観性である。これはおそらく間主観性とも言い換えられるものであろう。この点で W. K. フランケナや P. シンガーの指摘は正しいと言えよう。<sup>(26)</sup>

しかし、だからといって〈公正としての正義〉が客観的な道德的真理の否定を前提としていると考えるのは誤りである。ロールズ自身、そのように解釈されることを極力避けようとしている。<sup>(27)</sup> 〈公正としての正義〉が目

指しているのは、人々が自発的合意によって秩序を形成している社会である。したがって、客観的な道徳的真理に関しては、仮にそのような真理があるとしても、それが社会の秩序に体现されるのは、一人ひとりの人間がその真理を認識し、それに従おうと決意することを通じてでなければならないということが、〈公正としての正義〉の前提であると言うべきであろう。

### 3

もし全ての人が、あるいは全員に近い人々が、極めて広範囲の道徳的問題に関して同一の判断を下しているとするならば、それらの熟慮判断のみから、社会で生ずる様々な問題に対して解答を与えることができる道徳原理を導き出すことが可能であろう。そしてそれ以上のこと、つまり熟慮判断以外のものは必要でないことになる。熟慮判断のみから我々が必要としている道徳原理を得ることができるのではないか、というのが最初の論文におけるロールズの着想であった。

しかしながら現実是这样ではない。確かにある種の問題については我々の間に熟慮判断が成立しているとしても、一方において、我々が一致した判断を下すことができない問題も存在する。人々の間で意見が一致しているものとして宗教の自由、人種の平等、奴隷制の否定をロールズは挙げ、<sup>(28)</sup> 未だ意見の一致をみない問題として富や権威の配分を挙げている。

ここで社会契約の概念が登場する。自分たちが生きていく社会を律する道徳原理に関する契約を締結する場として、原初状態 the original position が設定され、そこで人々はいくつかの条件の下で原理を選択するとされている。

この原初状態における選択をどう解釈するかは、最初に述べた整合説的議論と契約説的議論の二つの議論をどう関連づけるかの問題とならんで、〈公正としての正義〉を理解し評価する際の重要な鍵と言ってよからう。



人々の間にまだ十分な合意が成立していない以上、改めて人々の自発的な同意が得られるような原理を作らなければならないことになる。このような原理を作り上げる過程を、社会契約の形を借りて表現したのが原初状態における選択であると私は解釈する。原初状態での合意は、自分にとって受入れられるのみならず、他人にとっても同様に受入れられる原理に探求する過程として理解することができる。原初状態は、ある原理がそこで選択されるであろうことを示されることによって、現実の社会に生きている我々が、ロールズが言う意味での道徳原理によって社会の秩序を維持していこうと望んでいる限りにおいて、その原理を受入れざるをえない場として設定されている。原初状態に課せられているいくつかの条件も、我々が、自分にとってのみならず他の人々にとっても受入れ可能な原理を作り上げようとするならば、当然受入れざるをえない条件なのである。

〈公正としての正義〉の理論の全体像を提示することがこの小論の目的であるので、原初状態に課せられている条件を全て吟味することはできない。そこでここでは、その中心であると思われる二つの条件ないしは前提を取上げることになろう。そして、それらの条件が原初状態に課せられている理由が、私が提示した解釈に従えば容易に理解できることを示したいと思う。ひとつは、人々はどのような観点から原理を選択しようとするかに関する前提であり、他のひとつは無知のヴェール the veil of ignorance である。

人々はそれぞれの人生計画を持っており、その人生計画が達成される可能性を最も高めてくれる原理を選択しようとする、と想定されている。<sup>(29)</sup>

何故このような前提が、原初状態における議論の出発点に据えられなければならないのか。それは人々が自由と合理性への確信もしくは願望を共有している、と考えられるからである。

自由への確信もしくは願望とは、各人は自分の生き方を自由に、少なくとも他人の判断や決定に束縛されることなく自由に、自分自身の決断によ

って決定することのできる存在であるという信念、あるいはそのように生きていきたいという欲求である。また合理性への確信とは、ある目標を設定したならば、その目標に最も確実に到達できる手段をとるべきであるという考えである。ロールズは、これらの確信や願望が我々の間で、少なくとも近代民主主義社会の人々の間で共有されうるはずだと考える。人々がこれらの確信を共有しているとするならば、そのような観点から選択された原理は、その限りでは受入れ可能なものとなる。<sup>(30)</sup>

だが、自分の人生計画の実現可能性を最大化してくれる原理を選択しようとする、という前提に関しては利己主義的であるという批判が寄せられている。さらに各人は自分の人生計画にのみ関心を持ち、他人の人生計画には無関心であるという条件もあるだけに、なおそのような印象を与えるようである。ロールズはこれに対して、この批判は誤りであると反論しているが、<sup>(31)</sup>ここでは次の一点にだけ触れておきたい。

各人が自分の人生計画にしか関心を持たないということは、自分自身のことだけにしか関心を持たず、他人に対して全く無関心であるということの意味しているわけではない。それぞれの人生計画の中に、恵まれない人々のために一生を捧げたいというような形で、他人への積極的な関心が含まれていることもありうる。<sup>(32)</sup>

要するにここで前提となっているのは、自分の生き方は可能なかぎり自分自身の判断によって決定したいと願う人間である。

ところでロールズによれば、各人の人生計画の実現に役立つものが、その人にとっての善なるものである。したがって、人生計画が各人の善の観念 the conception of the good を決定することになる。<sup>(33)</sup>

次に無知のヴェールを考えてみよう。原初状態における人々は、現実には当然知っているはずの情報を知らないという仮定の下で道德原理を選択するものとされている。これが無知のヴェールであるが、このヴェールによって覆われる情報には様々なものがある。自分の先天的・後天的能力、

気質や性格、社会的地位等々である。そのなかでとりわけ重要なのが、各人の人生計画すなわち善の観念に関する情報が各人に与えられないという条件であろう。何故この情報は排除されるのか。

無知のヴェールが課せられる理由としてロールズはいくつかのものを挙げているが、最も重視しているものは次の二つであろう。ひとつは、公平性 impartiality あるいは公正性 fairness の確保であり<sup>(34)</sup>、他のひとつは、原初状態のカント的解釈との関連において、自然的・社会的偶然からの影響の排除である<sup>(35)</sup>。しかし私は、カント的解釈が〈公正としての正義〉全体と整合的かどうか疑念を持っているので、当面は、カント的解釈には依らずに原初状態を解釈してみたいと思っている。そこでここでは後者はさておき、前者のみに議論を限定することにしよう。

しかしこのロールズが示している公平性あるいは公正性の確保という根拠だけでは必ずしも十分ではないように思われる。というのは公正性は、契約参加者の平等ならびに全員一致の条件によってとりあえず確保されるからである。この二つの条件の下で契約が公正でなくなるのは、情報が一部の人々には与えられ、一部の人々には与えられないときであって、情報が全員に与えられるならば不公正ではない。したがって公正性の確保という理由だけでは、無知のヴェールの根拠としては十分なものではない。

では何故各人の善の観念に関する情報は排除されなければならないのか。それはそもそもその情報が、全ての人々が受入れうるような原理の選択にあたっては使えない情報だからである。

人々のあらゆる価値判断の基礎をなすものは各人の善の観念すなわち人生計画である<sup>(36)</sup>。したがって一人ひとりの人が様々な原理を評価する際にも、各自の人生計画に照らして評価しようとする。そして自分の人生計画が達成される可能性を最も高めてくれる原理を選びたいと思い、そのような原理を共に採用しようではないかと他の人々にも提案する。もし人々が同一の善の観念を抱いているとするならばこのような提案も意味がある

う。しかしながら現実の我々は同一の目的を追求しているわけではない。我々は異なった欲求を持ち、相容れない宗教を信仰し、相対立する政治的・哲学的信念を持っている。したがってそれらのものに基づく我々の善の観念も異なり、場合によっては対立するものである。<sup>(37)</sup>

ロールズによれば、正義についての様々な観念の一つの重要な分岐点は、合理的である限りにおいて人々は同一の善の観念を持つはずである、ということをお認めるかどうかという点である。ギリシャ以来の支配的な流れは唯一の善というものを前提とするものであった。これに対してロック、カント、ミルに代表される自由主義は、これを否定して多様な善というものをその前提としていた。そして〈公正としての正義〉もこの自由主義の伝統を引継ぐものであるとロールズは主張する。<sup>(38)</sup>

このように人々が異なった善の観念を抱いており、かつ、たとえ人々が合理的であるとしても同一の善の観念を持つことはないとするならば、ある特定の善の観念、例えば自分がたまたま持っている人生計画の実現の可能性を高めてくれるという理由で、ある原理を選択しようではないかという提案は、他の人々にとっては意味のないものであろう。

だが私は、このように議論を展開していくために、あえて善に関する唯一の観念を否定する必要はないのではないかと考えている。全ての人が追求すべき唯一の善なるものはなく、それどころか、善の多様性はそれ自体望ましいことであるというロールズの主張<sup>(39)</sup>には確かに共感を覚える。しかし唯一の善の否定は、原初状態における選択の前提としては強すぎるように思う。ロールズは彼の正義理論における二つの基本的な概念として、既に述べた秩序ある社会と並べて、自由で平等な人間を挙げているが、この人間を自由で平等な存在として捉えるという前提と、今日の社会には相対立する善の観念が存在しているという否定しがたい現実だけで十分ではないかと思われる。またこの方が、原初状態に課せられる条件はできるだけ弱いものでなければならない、つまり、可能なかぎり多くの人々によって

共有されうるものでなければならない、というロールズの趣旨とも合致するであろう。<sup>(41)</sup>

要するに、自分の人生目標を自由に選択し追求する、平等な資格を持っていると考えると同時に、現にお互いに異なった人生目標を追求しているということを認識している人々が、自分にとって受入れ可能であるのみならず、他人にとっても同様に受入れ可能な原理を探求しようとするならば、ある特定の人生計画を前提として議論を進めることはできない。つまり各人の具体的個別的な善の観念は、ロールズが言う意味での道徳原理の探求に当っては、言わば使えない情報である。ゆえに原初状態においてもこの情報は無知のヴェールに覆われることになる。

人々の異なった人生計画に関する情報を前提とする道徳原理がないわけではない。ひとつは、フランケナが提唱している原理 the principle of equal proportionate satisfaction であり、他のひとつは、ゲームの理論の応用によって得られる原理である。ロールズはこれらの原理をそれぞれ批判しているが、ここでは省略する。<sup>(42)</sup>

しかしながら、ここで、初めに取上げた原初状態における第一の前提との関連で次のような疑問が生じてくる。すなわち、自分の善の観念に関する知識を欠いた状態で道徳原理を評価・選択できるのかという疑問である。ロールズはこの問題を、基本善 primary goods という概念を導入することによって解決しようとしているが、この議論の検討は次の機会に譲ることにしたい。

既に述べたように、原初状態において無知のヴェールのために人々に与えられない情報には各々の人生計画のみならず様々なものがある。しかしその中心は各人の善の観念である。それぞれの人生計画がその人にとって全ての価値判断の基礎となるものであるから、自分の社会的地位や先天的能力等に関する知識だけが与えられても我々にとっては意味がない。その知識だけでは原理を評価する基準が欠けていることになるからである。

原初状態という装置は一見すると、極めて寄異な感じを与え理解し難いものであるかもしれない。<sup>(43)</sup>しかしそこに課せられている様々な条件は、お互いを自由で平等な存在と見做している人々が、全ての人々が受入れうるような道德原理を作り上げたいと思うならば、その作成の過程において当然服さざるをえない条件なのである。<sup>(44)</sup>換言すれば、それらの条件は、実力によってではなく、同一の原理に自発的に従うことによって社会を形成したいという理想から要請されていると言うことができよう。この点で、道德原理を選択する際に従うべき条件を、道德言語の分析から導き出しているヘアとは異なっている。<sup>(45)</sup>

#### 4

以上のように設定された原初状態において、ある道德原理が選択されることが示されたでしょう。すなわち我々が共有している前提（つまり熟慮判断——ここで私が取上げたのは自由と平等と合理性への確信のみであったが）から、道德原理の形式的条件によって要請される手続（ここで考察したのは無知のヴェール）を経て、ある原理が導き出されたわけである。したがって、我々がすでに道德原理によって社会を形成しようと決意しているとすれば、我々は必然的にその選択された原理を受入れることになると考えられるかもしれない。

しかし必ずしもそうとは言い切れない。というのは原初状態における推論の前提となっている熟慮判断は、我々が共有している確信の一部にすぎないからである。それ以外にも多くの、あるいは少数であっても、熟慮判断があり、導き出された道德原理がそれらの判断と対立する可能性を否定することはできない。

たしかに熟慮判断のみから十分な道德原理を導き出すことはできなからた。しかしそれによって熟慮判断そのものが無効となるわけではない。我我はそのことから直ちに熟慮判断を放棄したりはしないであろう。原理を

導き出すには断片的で不十分であるとしても、人々の間で共有されている熟慮判断は熟慮判断として存在する。

人々はできることならば自分たちの間ですでに成立し共有されている道德的確信に合致するような原理を選択したいと思うであろう。何らの理由もなしに、そのような熟慮判断に反するような原理を選択しようとはしないであろう。もし何の理由もなく熟慮判断に反するような原理を選択したとすれば、その判断はそもそも熟慮判断ではなかったのである。したがって原初状態では、可能なかぎり我々が共有している確信に一致するような原理が選択されねばならない。

ロールズ自身、我々が得たいと望んでいる結論が得られるように原初状態は設定されなければならないと述べている<sup>(46)</sup>。この個所は多くの論者によって、ロールズの議論が循環論法に陥っていることを典型的に示すものとして指摘されている<sup>(47)</sup>。しかしこの批判はロールズの議論を根底から誤解しているのである。

このような批判を行っている論者は、我々が得たいと思っている道德原理が既に完全な形で存在しており、その原理が選択されるように原初状態を構成しようというのがロールズの狙いである、と解釈しているのであろう。しかしもし我々が得たいと思っている道德原理が既に完成されたものとして存在しているとするならば、何故その原理が原初状態で選択されることを証明する必要があるのであろうか。それはおそらく、その原理を正当化するためである。その原理が、単に我々が得たいと望んでいるだけでなく、さらに正しいものである、あるいは道德的に真なるものであることを証明するためである。つまり彼らは、原初状態ならびにそこでの選択を、ある原理が道德的真理であることを証明するための道具立てであり手続であると考えているのであろう。ちなみに、原初状態における契約をそのような観点から解釈するのは、〈公正としての正義〉に対して批判的な人々ばかりではない。例えばノーマン・ダニエルズはロールズを積極的に

評価しつつ、そのような一つの解釈を提示している。<sup>(48)</sup>

だがロールズがこのような意味での正当化を目指しているわけではないことは、既に第一節で論じたように明らかである。我々が得たいと思っている道德原理が既に完全な形で存在しており、その原理が選択されるように原初状態を構成しようというわけではない。仮りにそのような原理が既に我々の間で共有されているならば、そもそも原初状態など全く必要ない。人々はどのような原理を道德原理として受入れるであろうか、というのがロールズの考察の中心なのであるから、ある完全な形の原理が我々によって共有されているという事実そのものから直ちに、その原理は我々にとっての道德原理であるということになる。

原初状態は我々が得たいと望んでいる結論が得られるように構成されなければならない、ということは次のことを意味している。すなわち原初状態は、我々の間で共有されてはいるが、しかし未だ体系的でなく断片的でしかない判断に合致するような原理が合意されるように構成されなければならない、ということである。

しかし、だからといって原初状態を都合のよいように勝手に構成することはできない。原初状態そのものも人々の間で共有されている道德的確信に基づいていなければならない。もしそうでないとすれば、人々にとって原初状態で選択された原理を受入れるべき理由はないことになる。

別の言い方をすれば、道德原理を導出する前提を我々は恣意的に決めることはできない。その前提そのものが我々が共に受入れているものでなければならない。我々が共有している前提から導き出されたものであるからこそ、我々はその原理をも受入れようとするのである。

つまりロールズの道德原理を導き出す手続は、次のようにまとめることができる。

まず我々が共有している道德的確信のうち、原理の選択の基礎となりうるような抽象的・一般的な熟慮判断を使って原初状態を設定し、そこから原



理を導出する。その原理と残りの具体的個別的な熟慮判断を照らし合わせて、その原理とその導出過程が我々にとって受入れうるものであることを確かめる。<sup>(49)</sup> その原理と残りの道德的判断が合致しない場合には、再度、別の熟慮判断を使って原初状態を設定し直し、同じ手順が繰返され、残りの道德的確信と合致するような原理が求められる。しかるのちに、人々の間でまだ解決策に関して合意の成立していない問題に対してとるべき態度を、その原理を使って引き出す、という手続である。

しかしそれが常に可能であるとは限らない。熟慮判断の間に矛盾がないという保証はないからである。熟慮判断の間に矛盾があるであろうことは、すでにロールズの第一論文でも予想されていた。<sup>(50)</sup>

もしそうであるとするならば、既に有している道德的判断に固執する限り、我々が必要としている道德原理を得ることはできない。そこで熟慮判断そのものを見直す必要が生じてくる。例えば、人々が抱いている道德的確信の中には事実誤認等に基づいているものもあろう。<sup>(51)</sup> あるいは人々の道德的感情が非合理的なものである可能性も、ロールズは認めている。<sup>(52)</sup> そのような熟慮判断は、原初状態で選択された原理と矛盾を来すことによって、修正を強いられることになる。

また全ての熟慮判断が同じ程度的确信の下に共有されているわけではない。熟慮判断的确信の度合には、いわば強弱の差があるであろう。そのような道德的確信の間に矛盾が生じるときには、お互いに是非とも守っていきたいと思っている熟慮判断を残し、それほどでもないものを修正していくとするであろう。

例えば、A, B, 二つの目標があるとしよう。ところがこのAとBは、同時に達成することのできない、相矛盾するものとしよう。この場合我々はどうか。勿論、より強く望んでいる目標の方を選択し他方を諦めるであろう。

道德的確信の場合にも、理論的にはこれと同じことが言える。しかし現

実にはこの手続はもっとはるかに複雑になる可能性がある。

例えば、a, b, c, d, e, f, g の七つの熟慮判断があり、それぞれに対する確信の度合はaが最も強く、それから段々弱くなって、gが最も弱いものとしよう。そして、このうち最も強い二つの確信 a, b を基礎にして原理Pが導き出されたとする。この原理Pと判断cが矛盾するとき、Pの根拠となっている判断 a, bの方がcよりも強い確信を以て下されているのであるから、cの方が修正され原理Pはそのまま維持されることになる。Pと判断dの間に矛盾が生じた場合も同様に、dの方が見直しを迫られることになる。しかし仮に原理Pが判断cとだけでなく、d, e, f, gとも矛盾するとしたらどうであろうか。単純に判断c, d, e, f, gの方が修正されるとは言い難いように思われる。

このことをロールズが提示している原初状態に即して見てみることにしよう。

ロールズの原初状態の基礎となっている熟慮判断は既に見たように、各人は自由で平等な人間として扱われなければならないという確信である。この確信が、ロールズが考えているように我々の基本的確信をなしているとするならば、これから導出された原理が、我々が抱いているその他の熟慮判断のひとつと衝突するとき、我々は後者の判断の方を見直そうとするであろう。しかしその原理が、それ自体としてはそれほど強くはないとしても、その他の様々な判断と一致しないとすれば、我々は、一致しないその他の判断ばかりでなく、自由で平等な合理的人間観そのものをも見直すべきだと考えるかもしれない。そしてこの人間観を若干修正して、そこから得られる原理がその他の大半の熟慮判断と一致するというのであれば、この人間観の方を考え直そうとする可能性もある。

つまり、いわば熟慮判断が原初状態を間に挟んで向かい合う。そして双方の判断と合致するような道德原理を作り上げることを目指して両者の間で交渉が行われる。そのような原理が得られないときには、両方の道德的

確信、すなわち原初状態の基礎となっている熟慮判断、原理と照らし合わせるべき熟慮判断の双方に検討が加えられ、必要に応じて修正され、場合によっては放棄される。その結果得られた熟慮判断の全体に最もよく合致し、したがって我々にとって最も受入れやすい道德原理が選択されることになる。原理と再検討され修正された熟慮判断とが整合的であるこの状態を、ロールズは反省的均衡 *reflective equilibrium* と名づけている。<sup>(53)</sup>

多くの論者が陥っている誤解を避けるために再び繰返せば、ロールズは、この反省的均衡に到達した結果得られた原理が道德的真理を表しているに違いないと主張しているわけではない。換言すれば、そのような原理に従うべき義務を我々が負っているのだと言っているわけではない。そうではなくて、そのようにして得られた原理ならば、おそらく全ての、あるいは大多数の人々の自発的な同意が得られるであろうとロールズは考えるのである。

ロールズの手続き全体をさらに簡単にまとめれば、人々の間で既に成立している合意を基礎にして、まだ意見が対立している諸問題に対して何らかの解決策を示しうる原理を求める、<sup>(54)</sup> と言えよう。

ロールズにとって道德哲学の目的が、全ての人々の自発的な同意が得られる道德原理の探求である以上、この手続きはいわば当然のものであろう。

## 結 び

冒頭に述べたように、ロールズは正当化のために二つの議論を展開している、ということがしばしば指摘されている。この指摘はある意味において正しいと言えよう。しかしこの二つの議論は、相互に独立した別個のものとして提出されているわけではない。それらはひとつの一貫した探求の過程の中でそれぞれ展開されているのである。

〈公正としての正義〉の理論を判りにくくしている一因として、ロールズ自身も最近の論文で述べているように、その理論全体が目指しているも

のを必ずしも明確にしてこなかったということが挙げられよう。<sup>(55)</sup>

メタ倫理学上の諸理論に関して中立的であろうとするあまり、規範的言明の性質を明確にしていない、というブラントの批判はこの点を指摘しているのであろう。<sup>(56)</sup> しかしながらロールズは、通常使われている道德言語ないしは道德判断の意味もしくは性質の分析を行っているわけでは全くない。またその分析の上に立って規範的な理論を構築しているわけでもない。<sup>(57)</sup>

ロールズの道德理論の出発点にあるのは、ロールズにとっての理想社会としての秩序ある社会である。秩序ある社会とは、人々が強制によってではなく、自発的にある原理に従うことによって秩序を形成している社会であるが、そのような社会の原理となりうるような道德原理、すなわち人々の自発的な同意が得られるような原理の探求ということが、〈公正としての正義〉が目指しているものなのである。

そしてそのような原理を探求するためのものとして、整合説的議論も契約説的議論も存在する。公正としての正義の随所で熟慮判断が取上げられるのも、熟慮判断が人々によって共有されている確信や願望や理想を表しており、人々が共同で原理を選択するとしたならば、可能なかぎりそれらの判断に反しないような原理を選択しようとするであろう、と考えられるからにはほかならない。

だが残念ながら我々が共有している熟慮判断は未だ、原理を構成しうるほど広範囲には渡っていない。そこで改めて我々の同意が取り付けられるであろう原理を作らなければならない。人々が共有している道德的確信を参考にしつつ、全ての人々に受入れられる原理を模索する過程が、原初状態における契約という形で表現されている。

ヘアはロールズの理論を仮説的選択理論に属するものと考えている。<sup>(58)</sup> 仮説的選択理論とは、ある種の問題に対する正しい答は、ある一定の条件の下で、ひとりの人もしくは一群の人々が選択する答である、とする理論である。しかしこの解釈では、熟慮判断の役割を否定することになる。言い

換えれば、ヘアは整合説的議論を直覚主義的であるとして斥け、契約説的議論にのみ注目するがゆえに〈公正としての正義〉をこのように理解するのであろう。だが整合説的議論と契約説的議論の総合の上に成り立つロールズの道德理論の立場からすれば、この解釈は間違っている。

ロールズが考察の対象としている問題への「正しい」答は、社会の全成員が受入れうる答以外にはない。すなわち全ての人々が同意しうる原理以外にはない。ある原理が全ての人々が同意しうるものであるためには、その原理を選択する根拠が、特定の個人もしくは集団のみに妥当するものであってはならない。全ての人々に妥当する理由で決定されねばならない。であるからこそ、道德原理を選択する場としての原初状態では、原理選択の基礎となる前提や情報に制限が加えられることになる。全ての人々に受入れられる答を得るためにある一定の条件に服さざるをえないのであって、ある一定の条件下で得られた答を受入れなければならない、というのではない。

この意味でヘアのロールズ解釈は逆立ちしていると言えよう。ロールズの理論は仮説的選択理論ではなく、いわば現実的選択理論である。つまり、道德原理選定に関する合意が形成されるのは、仮説的状况においてではなく、あくまで現実の社会においてでなければならない。〈公正としての正義〉における道德原理とは、現実の我々が、周囲の状況や人間の心理的・生理的能力を考慮に入れつつ、我々が共有している道德的確信を基礎にして選択するものである。<sup>(59)</sup> このことは整合説的議論と契約説的議論をともに視野に入れることによって初めて理解される。

しかし〈公正としての正義〉が目指すものが、このように現実の我々が合意しうるような道德原理の探求にあるとするならば、たとえこれら二つの議論を組み合わせたものといえども、理論的正当化は真の意味での正当化とは言えないであろう。ロールズにとっての真の正当化とは、現実の人人がその道德原理をともに受入れ、それによって秩序ある社会を形成する

こと以外にはないであろう。<sup>(60)</sup> その意味で、〈公正としての正義〉において展開されている議論は、人々にこのような道德原理（ロールズが当面取り組んでいるのはその一部としての正義原理であるが）を採用しようではないかという提案もしくは説得と考える方がより適切である。

ロールズの道德理論は、秩序ある社会という理想をできることなら実現したいという思いを、他の大多数の人々も抱いているという前提の下に構築されている。もし人々がこのような理想を共有していないとするならば、ロールズの壮大な試みは全くの徒労ということになろう。しかし自発的同意によって形成された社会という理想に共鳴する人々にとっては、ロールズの正義理論は考察に値する興味深いものであろう。

#### 注

- (1) 例えば, David Lyons, *Nature and Soundness of the Contract and Coherence Arguments*, in *Reading Rawls*, ed. by Norman Daniels, Basic Books, Inc., 1975.
- (2) John Rawls, *Kantian Constructivism in Moral Theory*, *Journal of Philosophy*, September, 1980, pp. 517-9. 以下, “Kantian” と記す.
- (3) John Rawls, *The Independence of Moral Theory*, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 48, 1975, pp. 7-8. 以下, “Independence” と記す.
- (4) “Kantian.” p. 518.
- (5) John Rawls, *A Theory of Justice*, Harvard University Press, 1971, p. 15, pp. 126-7. 以下, *Theory* と記す.
- (6) *Theory*, p. 134.
- (7) *Theory*, pp. 4-5, pp. 130-1.
- (8) *Theory*, pp. 108-10.
- (9) Chaim Perelman, *Justice et raison*, L'Université de Bruxelles, 1972, pp. 15 f. William A. Galston, *Justice and the Human Good*, The University of Chicago Press, 1980, pp. 100-6.
- (10) *Theory*, p. 7, p. 259.
- (11) *Theory*, p. 17.

- (12) John Rawls, Justice as Fairness: Political not Metaphysical, *Philosophy & Public Affairs*, No. 3, 1985, pp. 231-2. 以下, “Political” と記す.
- (13) “Kantian,” p. 520.
- (14) 但しブランドの理論において, 一人の人間が道徳原理を選択する際に, 他人がどのような原理を選択するかということが全く考慮されないわけではない. Richard B. Brandt, *A Theory of the Good and the Right*, Clarendon Press, 1979, pp. 213-4. R. M. Hare, *The Language of Morals*, Clarendon Press, 1972, Chap. 4.
- (15) John Rawls, Outline of a Decision Procedure for Ethics, *The Philosophical Review*, 60, 1951, p. 188. 以下, “Outline” と記す.
- (16) *Theory*, sec. 9.
- (17) Norman Daniels, Wide Reflective Equilibrium and Theory Acceptance in Ethics, *The Journal of Philosophy*, May, 1979.
- (18) Peter Singer, Sidwick and Reflective Equilibrium, *The Monist*, July, 1974, p. 495.
- (19) “Outline,” pp. 182-3, p. 187, p. 189.
- (20) *Theory*, pp. 580-1, pp. 518-9. また次の部分も参考になろう. “Political,” p. 229.
- (21) R. M. Hare, Rawls’ Theory of Justice, in *Reading Rawls*, pp. 82-3, R. B. Brandt, *A Theory of the Good and the Right*, pp. 16-23, pp. 235-6.
- (22) “Kantian,” p. 519, p. 564.
- (23) “Kantian,” p. 557.
- (24) J. L. Mackie, *Ethics*, Penguin Books, 1981, Chap. 1.
- (25) *Theory*, pp. 516-7. “Kantian,” p. 519, pp. 568-70.
- (26) William K. Frankena, Recent Conceptions of Morality, in *Morality and the Language of Conduct*, eds. by Hector-Neri Castañeda and George Nakhnikian, Wayne State University, 1965, pp. 5-8. Peter Singer, Sidwick and Reflective Equilibrium, p. 494.
- (27) “Political,” p. 230. “Independence,” p. 7.
- (28) *Theory*, pp. 19-20. “Political,” p. 228.
- (29) *Theory*, p. 142.
- (30) “Kantian,” p. 518, p. 520, pp. 543-5, p. 572. 合理的に行動したいという欲求については, *Theory*, pp. 414-5.
- (31) *Theory*, p. 129, pp. 147-8. “Kantian,” pp. 530-2.

- (32) "Political," pp. 233-4.
- (33) *Theory*, pp. 408-9.
- (34) *Theory*, pp. 18-9. John Rawls, Reply to Alexander and Musgrave, *Quarterly Journal of Economics*, 88, 1974, pp. 637-8.
- (35) *Theory*, sec. 40. John Rawls, Fairness to Goodness, *The Philosophical Review*, 84, 1975, p. 537.
- (36) *Theory*, p. 409.
- (37) "Political," p. 230, p. 245.
- (38) John Rawls, Social unity and primary goods, in *Utilitarianism and beyond*, eds. by A. Sen and B. Williams, Cambridge University Press, 1982, pp. 160-1.
- (39) *Theory*, p. 448.
- (40) "Kantian," p. 520.
- (41) *Theory*, p. 18. 私の視点とはかなり異なっているがブキャナンも、無知のヴェールとそれに伴う primary goods の条件を課するためには、必ずしも善の観念に関して強い前提をおく必要はないと論じている。Allen Buchanan, Revisability and Rational Choice, *Canadian Journal of Philosophy*, November, 1975.
- (42) *Theory*, p. 134, pp. 510-1. J. Rawls, Fairness to Goodness, sec. VII.
- (43) このような印象は、例えば次の対談におけるマギーの発言に見られよう。*Men of Ideas*, British Broadcasting Corporation, 1978, p. 248.
- (44) ドゥオーキンが原初状態の基礎には平等な人間観があると述べている。一方フリードは、〈公正としての正義〉の根底には自由があるとする。ともにロールズの一面しか見ていないように思われる。Ronald Dworkin, *Taking Rights Seriously*, Harvard University Press, 1977, pp. 150-83. Charles Fried, Justice and Liberty, in *Nomos VI: Justice*, eds. by C. J. Friedrich and J. W. Chapman, The Atherton Press, 1963.
- (45) R. M. Hare, *Moral Thinking*, Clarendon Press, 1981, Chap. 1.
- (46) *Theory*, p. 141.
- (47) R. M. Hare, Rawls' Theory of Justice, p. 84. Marcus G. Singer, Justice, Theory, and a Theory of Justice, *Philosophy of Science*, December, 1977, p. 612.
- (48) Norman Daniels, Wide Reflective Equilibrium and Theory Acceptance in Ethics.



- (49) J. Rawls, *Fairness to Goodness*, p. 539.  
最初の論文においてロールズは、熟慮判断として具体的・個別的な判断しか認めていなかった。しかし『正義の理論』以後に発表した多くの論文の中で、熟慮判断には、抽象的なものから具体的なものまで様々なレベルの判断があることを繰返し述べるようになってきている。"Outline," p. 183. John Rawls, *The Basic Structure as Subject*, in *Values and Morals*, eds. by A. I. Goldman and J. Kim. Reidel, 1978, p. 59.
- (50) "Outline," pp. 188-9.
- (51) "Outline," p. 189. *Theory*, p. 48.
- (52) *Theory*, p. 489.
- (53) *Theory*, p. 20. "Independence," pp. 7-8.
- (54) *Theory*, p. 582.
- (55) "Political," pp. 224-5.
- (56) R. B. Brandt, *A Theory of the Good and the Right*, pp. 20-1.
- (57) *Theory*, p. 111. "Independence," p. 10.
- (58) R. M. Hare, *Rawls' Theory of Justice*, p. 87.
- (59) "Kantian," pp. 533-5. "Political," p. 238.
- (60) Robert Nozick, *Anarchy, State, and Utopia*, Basil Blackwell, 1974, pp. 212-3. ノズィックがここで述べていることを、このように解釈することもできよう。